

クイズ。約千本のリンゴから、最終的に何本が選ばれているでしょうか。

リンゴの果実ができたら品質を調査し、形や味、病気への耐性などを調べ、良い果実になる木を選びます。

7〜8年後

「ぐんま名月」は開発から約50年。原木は今もこのセンターで元気に成長しています。

生産者に接ぎ木した苗木を渡し、普及します。

選んだリンゴの枝を土台となる木に接ぎ木して育て、生産現場で生かせるかと判断できたら品種にします。

沼田の美味しいリンゴを味わってくださいね

他には「新世界」や「スリムレッド」が生まれました。

クイズ第2弾。ぐんま名月は

全国的に栽培が広がった「ぐんま名月」は1番人気。できの良い年は蜜が多く、皮の近くまでびっしり入っています。温暖化で色が付きづらくなっている品種も多い中、「紅鶴」は着色が良く味も抜群で、群馬の気候や時代に合ったリンゴです。リンゴ生産者を取り組みを紹介する「全国りんご研究大会」では、「紅鶴」の栽培について事例を発表しました。思い入れもあり、中生品種として定着させたいと考えています。

収穫直後の新鮮なリンゴを味わってもらうと、リンゴ狩りと呼びかけています。お気に入りには小ぶりで皮が薄く、丸かじりにぴったりの「スリムレッド」。パリパリした食感で、やや酸味のある濃厚な味わいを楽しめます。

大学卒業後に都内で就職。家業を継ぐために26歳で地元に戻りました。温暖化や災害に対応できる栽培や品種の研究、機械を導入した作業の効率化などを模索し、沼田のリンゴを楽しんでもらえるよう力を入れていきます。

「紅鶴」栽培事例を発表
色づき良く 定着図る

りんごの家 山口果樹園
山口浩輝さんー白沢町下古語父ー

リンゴの県育成品種は全て、中山間地園芸研究センターで開発されました。農場は約4・2畝で、リンゴはそのうち1・4畝で栽培されています。

私たちはリンゴ新品種の開発をしています。

今日は新品種が生まれる過程をお話します。

県農業技術センター
中山間地園芸研究センター
星野裕昭さん

同センター
松井郁人さん

コマ割漫画風 研究員と学ぼう

おいしいリンゴができるまで

新品種が登録されるまで約15年。全国的に栽培が広がっている「ぐんま名月」も、ここで生まれました。

新品種を作り出すためには、人工交配をします。

どのような品種を作りたいかを決めて、交配の親を選びます。

ぐんま名月の掛け合わせ

母親となるリンゴ「あかぎ」 × 父親となるリンゴ「ふじ」

「ぐんま名月」

受粉した花からできた果実を育てます。

他の品種の花粉が付かないように、袋を掛けます。

めしべだけになった母親の花に父親となる品種の花粉を付けます。これが受粉です。

春、花が咲いたら、自身の花粉による交配を防ぐため、母親となる品種のおしべを取り除きます。

育苗箱にリンゴの種をまきます。

育苗箱の中で発芽させて育てます。

翌年になったら、育てた果実から種を取ります。

大きくなったら畑に植え付け、果実がなるのを待ちます。同じ親でも兄弟姉妹が異なるように、リンゴも1本1本が違う個性を持つ木になります。